

COVID-19

浮かび上がる
不安と課題

今年4月、新型コロナウイルスのクラスター(集団感染)が発生した老人保健施設「茨戸アカシアハイツ」(北海道札幌市)。7月3日に終息宣言が出されたが、一時は看護師不在という危機的状況だった。

そんなアカシアハイツに東京から駆け付けて、支援に入った看護師、金澤絵里さんに話を聞いた。

(聞き手・吉田千亜)

東日本大震災が転機に

2011年、アメリカで看護師の研修を受けていた金澤絵里さんは、3月1日、北海道に住む妹の出産の手伝いで帰国。その10日後、東日本大震災が起きた。震度5強の地震と、東北沿岸部の被害を目の当たりにして「困っている人のために役に立ちたい」と思うようになった。



▲前列左から2人目が金澤さん

2013年、ボランティアでアメリカへ。そこでの経験から公衆衛生を学ばなければと思い、日本で派遣の仕事しながら資金を貯め、2016年タイの大学で公衆衛生のマスター(修士)を取った。その後、僻地や地域医療を学ぶため、礼文島、浜頓別町、余市町などで仕事をした。

2018年3月には、JIM-NET(イラクで小児がんの子どもや難民の支援をする団体)の現地駐在員として1年間勤務。その後、650床の病院を建てるプロジェクトで、看護部立ち上げのため2019年3月からバングラディシユで働いていた。しかし、今年3月24日、新型コロナウイルス拡大を受け、日本へ緊急帰国した。

「老健クラスター」の現場で

泣きながら看取った

まだ感染が少なかったバングラディシユからの帰国は比較的スムーズで、空港から実家のある秋田県へ。自分自身を2週間隔離し、実家に戻って在宅ワークをしていた頃、防衛省のホテルで検疫の看護師を募集していることを「ボランティアナースの会」のメーリングリストで知った。優先度が高いのは新型コロナウイルスだと考え、働くことを決めた。

アカシアハイツの支援へ

感染が拡大し続けていた4月24日から東京市ヶ谷のホテルでの検疫業務に2週間従事。今度は同メーリングリストに、北海道の老健「茨戸アカシアハイツ」で看護師急募とあり、5月8日からそこで働き始め

た。その頃のアカシアハイツは、戦場のようだった。4月28日に新型コロナウイルス感染の「クラスター」と認定され、30日には入所者2名が施設内で死亡していた。5月1日時点で入所者40名、職員10名の陽性が判明。5月2日には、看護師がゼロになり(通常は10名以上)、100人ももの入所者のケアを数少ない介護職員、相談スタッフ、リハビリ職員で行ない、応援の医師や看護師が入った後も、職員の陽性者は増えていった。介護職員は夜勤続き。家に帰れず、車で寝泊まりするスタッフもいた。アカシアハイツに関する報道が過熱すると、応援看護師に対するタクシーの乗車拒否も起きた。5月8日には、入所者54名が陽性になっていった。

外部からの応援看護師4名で、日勤・夜勤・明け・休みのシフトを繰り返す中、看護師1名が陽性となったが、18日まで追加要員はなかった。感染防護のため、2階を陽性者、1階を陰性者と分けていたが、看護師1名しか配置できない夜間は、2階と1階を行き来しなければならぬ。休憩に入るまで8時間、防護服で勤務し続けた。

入所者全員の検温、酸素飽和度の測定を1日2回。発熱のある人にはカロナール(内服・座薬)の対応。食事の経口摂取ができない入所者には点滴投与。環境変化に伴う認知症悪化、点滴の自己抜きリスクなどにも対応する。元気づけに見える人でも酸素飽和度が低下し、酸素を投与しても数時間で急変することもある

た。病院への搬送はできず、施設内で看取り、保健所から届けられた納体袋にご遺体を納めることになっていった。搬送の必要を訴え続けたが叶わず、4月30日から5月15日までに11名が施設内で死亡。「入所者さんたちは見捨てられた」と、悔しさを申し訳なきを抱えて介護職員と泣きながら看取ったこともあった。ここで割り切れてしまったら、看護師としておしまいだと金澤さんは考えている。

対感染症のシステム確立を

5月16日、ようやく施設対策本部が設置された(北海道、札幌市、DMAT、施設法人)。26名の入所者の病院搬送をし、5月後半には入浴を再開、食事も1日3回に戻り、老健としての機能が戻りつつあった。最終的に入所者の陽性者は71名、職員21名(5月22日まで)に増え、陽性者がゼロになったのは6月17日だった。

コロナ禍で経済が回らないのも確かに問題だが、僻地の医療体制を知る金澤さんは、「GOTOキャンペーン」による感染拡大を懸念する。医療崩壊が起きると、アカシアハイツのように介護施設での看取りが再び起きてしまう。金澤さんは、新型コロナウイルスの恐ろしさを痛感し、日常生活に細心の注意を払いながら看護に当たっていた。アカシアハイツでの出来事を「仕方がないとは思えない。あつてはならないことだった」という。こういった感染症に対応する訓練や、システム確立の必要性を金澤さんは実感している。今後、責任の所在を明らかにすべく検証が必要だ。